

# ジャパングリエイト [撮影・写真制作会社]

Japan Create Co.,Ltd.

## DreamLabo 5000



写真がデジタルになり、出力がDreamLabo 5000になったことで、業務効率が大幅に向上。写真アルバム製作で培った、画像処理と製本・加工技術を活かして、より多くの人にこの品質を体験してもらいたい。

ジャパングリエイト株式会社は、1996年に創立されたウェディングの撮影およびアルバムの製作を中心に、写真・映像の分野でさまざまなサービスを展開している会社です。

2014年1月、ジャパングリエイト株式会社はDreamLabo 5000を導入。そのきっかけは何だったのでしょうか。そして、どのように活用しているのでしょうか。ジャパングリエイト株式会社専務取締役 星野俊光さん、名古屋工場 部長 関信行さん、フォトソリューション事業部 主任 下山孝弘さんにお話を伺いました。

— DreamLaboを導入された経緯を教えてください。

**星野** ● 弊社はいわゆるフォトブックという名前もない20年以上前から、1冊からの写真集を製作しておりました。当時は銀塩機を使用していましたから、プリントした印画紙を貼り合わせて、1冊ずつの写真集を作るということを行っていたんですね。

時代が変わってカメラがフィルムからデジタルになると、写真そのものが持っている情報量が銀塩の印画紙では再現できないところに達してきました。そこでいま銀塩で作っているアルバムや写真集をどうしていくべきかと考えていたときに、出会ったのがDreamLaboでした。

**関** ● 弊社が銀塩時代を作っていたアルバムは、一見現在の商品とあまり変わらないように見えますが、写真や絵柄、ラインなどのレイアウト要素を寄木細工のように組み合わせ、インスタントレターで文字を入れるという非常に手の込んだ手法を取っていました。

現在では逆にフルハンドメイドアルバムという言いかたをするのですが、当時、デザイン性の高

いアルバムを作るにはこれしか方法がなかったんですね。生産効率は高くありませんでしたが、大らかな時代だったので、1ヶ月、2ヶ月かかってもお客さまは待ってくださっていました。しかし、アルバム製作にも、よりスピードと画質が求められる時代になり、一方で銀塩分野からメーカーが徐々に撤退したことによって、銀塩は技術的な進化が止まってしまった。結果、それまで“きれいだね”と言われていた銀塩プリントが、“普通だよだね”と言われるようになりました。そこでより画質のいいものを検討する必要が出てきたのです。

**下山** ● 印画紙の供給が変わったことで、品質が圧倒的に落ちることもありましたが、今までできていたことができなくなってきたという危機感もありました。出力物の量に対して銀塩機の稼働率が高過ぎて、クオリティをコントロールするのが困難になってきたということもあります。出力物の量が多くなっていけばいくほど、色を安定させるのは難しく、ワークフロー的にも誰でもできるようなかたちでクオリティをコントロールする必要があったわけです。

**星野** ● そうしたなかでさまざまな検証を行なった結果、銀塩よりもはるかに色域の再現が広く、12インチという銀塩ではスタンダードなサイズをそのまま出せるDreamLaboに切り替える決断をしました。

— 検討にあたっては他機種も候補にあったのではないかと思います。最終的にDreamLaboを選んだ理由は何だったのでしょうか。

**星野** ● 私自身が写真家として作家活動もしているので、自分の中に色のゴールのようなものがあります。DreamLaboでテストをしたとき、なにも加工しなくても、目指す色がそのまま出てきた。

そのとき、“これはいけるんじゃないか”と直感的に思いました。ブライダルデータをプリントしてみてもまったく問題がなかったこともあり、実はそれほど悩みはありませんでした。

ほかの選択肢としては、いわゆる液体トナータイプの機種を検討したこともありましたが、どうしてもCMYKに変換しないといけないので色再現という点で品質的にも工程的にも決め手にはなりません。使用する用紙も一般的な印刷用紙なので、その後、ラミネート処理が必要という点でも銀塩時代と変わりません。写真は薄いフィルム1枚でも画質が変化してしましますが、ラミネートしなくても使用できるDreamLaboは他機種と比べて、明らかに抜けがよく、解像感も高かった。

**関** ● ラミネートについては現場としても非常に大きなポイントでした。銀塩機の場合は工程としてはまず印画紙特有の黒い点をチェックし、不良があれば焼き直しをします。OKが出たものをラミネートしていくのですが、この工程ではほこりの混入をチェックし、不良が出ればやり直す……ということになります。下手すると納品部数の3倍くらい出力する必要があったんです。

DreamLaboの光沢タイプはそのままでもラミネートに匹敵する光沢感があるため、ラミネートという工程、そのものが不要になります。これは大きなメリットでしたね。実際、いま弊社でDreamLaboを使う場合、加工・製本予備はほぼ0です。これは、色が安定していることも大きな要因ですね。

**下山** ● 製本・加工という点で言えば、両面印刷ができることによって、銀塩時代のように印画紙を貼り合わせる作業がなくなり、作業効率の面でも圧倒的に変わりましたね。1日につくれる冊数も

圧倒的に増えました。コストパフォーマンスで考えても、用紙1枚あたりの単価は高価ですが、工程数が減ることで人件費が減り、トータルではコストダウンになっています。

— 導入するにあたり、社内のワークフローも変更しなければならなかったと思うのですが、導入・移行はスムーズに進んだのでしょうか。

**星野** ● 銀塩時代からフィルムの現像・出力からアルバム製作まですべてを社内で行なっていましたから、時代時代によって出力機の置き換えは経験していることです。ですから、出力機がDreamLaboに変わったからといって全体のワークフローを大きく変更しなければならないということはありませんでした。

デジタルカメラのデータ自体も、弊社はEOS 20D(2004年)の頃からデジタルに移行しはじめていましたから、取り扱いかたが変わるということもありません。

**関** ● 極端な話、出力機を置き換えるだけですからね。メンテナンスも銀塩機に比べると楽ですし、薬品のトラブルもない。もちろん暗室も必要ありません。色も安定していますから、後日追加オーダーがあってもまったく同じ色で出すことができます。銀塩時代に比べて、運用に関してはかなり楽になりました。

**星野** ● 銀塩機もデジタルデータから出力ができるようになったとはいえ、技術自体は非常に古く、曖昧なものです。同じ型番の機械を5台並べても全部色が違うこともあり、そうした状況で同じ色を出すためには職人的な技術が必要でした。その技術を継承しようとしても、新しい人たちに教えるのは非常に難しいのです。DreamLaboはRGBのまま出せるので、オペレーターのスキルがさほど必要ではないという点もワークフローを考えるうえでは大きなメリットになりました。管理者がいれば、実際に運用する人はパートの方でも問題ないのですから。

**関** ● 銀塩プリントはそもそもカラーマネージメントをして色を合わせるという世界ではなく、ほとんどの場合はオペレーターの経験と勘頼り。撮影データがAdobeRGBであっても、銀塩機で出す以上、その色域はフルに活かせないという点でも銀塩プリントの限界を感じていました。

— 具体的に銀塩機との違いを感じるころはどのような点ですか。DreamLaboの表現をどのように評価されていますか。

**関** ● 一番は色の幅ですね。銀塩はどこまで頑張っても、sRGB相当の色域までしか出せませんでした。DreamLaboで一番よかったのは、AdobeRGBのように色域が広いものでも、ほぼそのまま出ること。写真をディスプレイで見ている世代にも違和感がないのです。たとえ、同じ



2つのサイズ、3種の用紙から選べるアートブック作成サービス「art+books -アートブックス-」  
<http://www.art-books.jp/>

sRGBのデータでも、銀塩とDreamLaboを比べるとDreamLaboのほうが圧倒的にきれいですよ。照明の色温度の影響を受けやすい銀塩に比べて、DreamLaboはどこで見て同じように見えるのも評価できるポイントで、DreamLabo導入以降、色に関してはユーザーから「色が違う」という意見をいただくことは一切なくなりました。表現力とテクノロジーの進化ですね。

**星野** ● より細かい点でいうと、シャドウの中のシャドウ、ハイライトの中のハイライトがしっかり描画される。ウェディング業界は白と黒が多い世界なのですが、DreamLaboならRGB0~10の黒でも階調できる。これは大きなメリットでした。

**下山** ● ハイライト側の階調を出すのも銀塩では難しかったですね。全然粘らないです。一定のところまでいくとすべて白になってしまい、トーンジャンプが起きてしまいます。銀塩時代はそうした部分にはわざとノイズを入れて、トーンジャンプを防ぐ処理を逐一行っていました。

**星野** ● あまりにもシャドウ側がしっかり出るので、今度はディスプレイ環境の整っていない写真家さんから、「黒をつぶすつもりで撮ったのになんで黒がつぶれないんだ」という指摘をいただくようになって(笑)。ちゃんとしたディスプレイで見ないと確認できないような黒の深い階調までDreamLaboは出してくれますから、撮影するほうも暗部のディテールに気を使うようになりました。

**下山** ● ブライダル業界は社内のフォトグラファーだけでなく、社外のフォトグラファーにも協力をいただいているので全員のディスプレイ環境を揃えるというのは難しいんですね。いまは徐々に弊社のディスプレイに合わせた環境をご用意いただいて、全国の各フォトグラファーが見ている色がすべて同じ、そしてそれがプリントになるというフローを整えているところです。

**星野** ● 私たちにとっては、写真がデジタルになり、出力がDreamLaboになったことで、非常に仕事がしやすくなりました。銀塩時代の、経験が



A4シート出力を10枚から行なえるポートフォリオ向け出力サービス「ARTFOLIO」  
<http://www.art-books.jp/portfolio/>

モノを言う職人ではなく、今の技術に適した知識を持つ職人として、私たちの存在価値が出てきていると感じています。

— 用紙はいま何をメインにお使いですか。商品の値づけや位置づけはどのように設定されているのでしょうか。

**下山** ● ブライダル関係ではいま、光沢タイプ(グロス)とサテンタイプの2種類を使用しています。価格設定は同一で、どちらの質感がいいか、お客さまに選択していただくかたちになっています。好みにもよりますが、ブライダルには圧倒的に光沢のほうが向いていますね。撮影したままのデータでも、黒の締まりもよく、ハイライトの階調も忠実に出ます。細かく色補正をしたんじゃないかというくらい、高いクオリティを出せるんです。逆にサテンのほうはもう少し落ち着いた印象になるので、ナチュラルテイストを求める方によく選ばれています。

**星野** ● 銀塩の時代は印画紙にかけるラミネートの種類で光沢とマット調を選んでいたのですが、あまりに選択肢が多いと逆に選びきれなくなるので用紙は絞って商品化しています。逆に、プロの写真家の方に対して展開している「art+books」に関しては、用紙の制限を設定せず、光沢タイプ、ラスタータイプ、サテンタイプを中心に展開しており、ファインアートタイプ等についても表現に合わせて選べるようにしています。私個人として一番評価しているのは、光沢タイプですね。光沢が一番再現性も高く、黒の締まりも一番よく出ていますし、何よりオンデマンドで何も加工せずに光沢のまま製本できるというのはこれだけです。これは他にはない強力なアドバンテージだと思います。

— いまお話しいただいた「art+books」について伺います。これはどのような経緯で始め



左:名古屋工場内に設置されたDreamLabo  
中: DreamLaboの色を管理するために、1日に2度、出力しているグレー画像(R128 G128 B128)  
右: DreamLaboのオペレーションを担当するスタッフ。銀塩時代から比べて管理、運用は飛躍的に楽になった、と話す



『Don Det』  
写真：小澤太一／デザイン：三村漢  
仕様：W300×H247mm／上製本  
用紙：ラスタータイプ  
販売価格：10,000円、20,000円(フォトアクリルつき)

られたのでしょうか。  
星野 • DreamLabo 導入にあたり、ウェディングのアルバムをDreamLaboに切り替える一方で、写真家さん向けにも商材を提供したいと考えていました。当時、インクジェットタイプのオンデマンドフォトブックはありませんでしたからこれは商機になるだろうと。こうしたビジネスは、他社に先駆けてやったほうが確実に経験値を貯められますので、ウェディングと同時にスタートしました。  
写真を撮影したら最終的にはプリントアウトして発表するというのが、ほぼすべての写真家さんのスキームだと思いますが、ポートフォリオ製作にも少なくないお金と時間がかかります。DreamLaboなら展示データをそのまま渡すだけで、無線綴じで本にでき、価格もA4クリアファイルと同等、しかも時間がかからないという、写真家さんにとってこんないいしくみはない、そう私自身が思っていたというのも理由のひとつです。現在では、「art+books」のほか、ポートフォリオ製作用に冊子形態ではなく、シートで提供する「ARTFOLIO」というサービスも行なっています。

— 「art+books」のサイズや製本仕様はどのように決定されたのでしょうか。  
星野 • 「art+books」には260サイズ(W260mm×H240mm)と320サイズ(W320mm×H300mm)という2種類があり、いずれも正方形から少しだけ横に長くなっています。というのは、ノド部分が多少見えなくなるので、このぶんを判型を大きくして、開いたときに、きれいに見えるように工夫しています。

— DreamLaboの用紙も光沢タイプ、ラスタータイプ、サテンタイプ、マットタイプ以外にもさまざまな用紙が出てきています。こうした動きをどのように感じていますか。  
下山 • 用紙が増えることでユーザーが求めるさまざまな嗜好に合わせられるようになってきましたから、非常にいいことだと思います。ブライダル商品では、製作ワークフローを複雑にしないためにも用紙と厚みはテンプレート化し

ていますが、プロの写真家さんの場合、色や質感に対する要望も細かくなってきます。より追い込んだ表現をする方に対しては要望を叶えることはできるようになりました。紙や印刷に詳しい方ほど、単純な発色だけでなく、紙の質感や雰囲気も重要視されますから、特にファインアートタイプのような風合いのある紙が出たことはすごくよかったですね。  
星野 • ファインアートタイプはDreamLaboの染料インクと相性がいいと思いますよ。風合いのある紙に出しても、あざやかさがあります。用紙の多様性、DreamLaboの高速性、そして染料インクのあざやかさがマッチしたうえで、用紙が増えてくると、もっともっと世界が広がっていくと思います。  
下山 • いろいろな用紙を試してみたいという要望にも応えやすいのがDreamLaboのいいところですね。これまでは写真家の方と打ち合わせをするとき、一番最初に「どの用紙にしますか」とサンプルを見せて、選んでいただいた紙でテスト印刷して……というかたちでしたが、DreamLaboの場合、お預かりしたデータを全用紙で出してしまうんですよ。そして、「どれが合うか選んでください」とお伝えしています。スピード感が違いますよね。オフセット印刷に慣れた写真家さんでも、驚かれますから。

— オフセット印刷で写真集を作る場合、色校正に多くの時間をかけることになりましたが、DreamLaboでは色校正はどのように行なっているのでしょうか。  
下山 • これまでの写真集の色校正に関していえば、DreamLaboならほぼ半日ですべての色校正が終わります。1枚ずつ出しては確認して、必要があれば調整して再出力……を繰り返すだけです。短時間の間に複数回の色校正が行なえるので、「圧倒的にやりやすい」「思ったような色が出せる(=突き詰められる)」との声をいただいています。オフセット印刷で、時間をかけて初校、再校……と色校正を取られている方からするとありえないスピードだと思います。

DreamLaboの場合、印刷のように面付けによって色の影響を受けないのも大きなポイントです。1点ずつ、Photoshopで調整をしていけば、すぐにそれが反映されたプリントが出て、本番でもそれと変わらないクオリティで出せる。直感的でわかりやすいですね。  
關 • DreamLaboは基本的にディスプレイの色がそのまま出ますから、カラーマネージメントされたディスプレイさえあればシミュレーションも容易です。用紙による色の違いまで確認したいようなヘビーユーザーには用紙ごとのICCプロファイルでシミュレーションしてみせると、ほぼ同じ色が出る。テクノロジーの進化の賜物ですね。

— これまで製作された写真集には、アクリルケース入りのものや化粧箱入りのものなど、非常に凝ったパッケージのものが目につきます。こうしたノウハウはどのようにして得たのでしょうか。  
星野 • 私たちはもともとブライダルでこうした商品を数多く作ってきましたからね。応用できる部分も多いのです。これまで培ってきた製本・加工ノウハウと技術があるので、デザイン側からどんなアイデアが出てきても、すぐにかたちにすることができるとは私たちの強みだと思います。  
下山 • ブライダルの商材を扱う会社や製函会社から新しい技術や加工について提案を頂くことも多いのですが、価格の問題で一般の商材には利用できないことも多々ありました。しかし、限定写真集のような、高価だけれど質の高いものを少数だけ作るという場合なら使えることもあります。そういう意味では、私たちだけでなく、みなさんにとって刺激になるような商品づくりができていないんじゃないかなと思いますね。  
星野 • 冒頭の關の話にもありましたが、紙を切り抜いて写真嵌め、1枚の紙のように仕立ててからラミネートをかける……外国の方が「クレイジーだ」と言うようなアルバムを作り続けてきた私たちにとって、1冊1冊手作業で作るといえるのは、ごく当たり前のことで、特別なことではないんです。むしろあのアルバムに比べれば、いまの作業ははるかに楽になっていますから(笑)。



『はな 桜もよう』  
写真：米美知子  
デザイン：田代宏之  
仕様：上製本(W440×H305mm／写真右)+並製本(W430×H295mm／写真左)、箱・スリーブケース付き  
用紙：ラスタータイプ+ファインアートタイプ  
販売価格：50,000円



『Design』  
写真：中西敏貴／デザイン：三村漢  
仕様：W357×H303mm／上製本・スライドケース付き  
用紙：ラスタータイプ  
販売価格：35,000円  
80冊限定



『Kor La』(コルラ)  
写真：竹沢うま  
デザイン：おおうちおさむ  
仕様：A3変型・上製本  
用紙：ファインアートタイプ  
販売価格：50,000円  
30冊限定



— DreamLaboを今後どのように活用されるのか。予定があればお聞かせください。  
下山 • いまは著名な写真家の方が50部、100部という単位で作られています。一般の方から「ご自身の結婚何周年記念の本がほしい」「両親にオリジナルのアルバムを贈りたい」というようなカスタマイズのオーダーをいただくようになりました。特殊な仕様になると価格も上がってしまいますから、こうした一般の方を対象にカスタマイズしていく商品も少しずつ検討しています。もうひとつの課題として、「DreamLaboの写真集はいいとは聞けれど、見たことがない。どこで見られるのか」というご意見をよくいただくので、DreamLaboの表現力と質感を見ていただける機会を作りたいですね。とにかく一度見て

いただけたら、「こういうものが作れるなら自分も作ってみよう」という連鎖を生まれるのではないかと考えています。  
星野 • 当初はDreamLaboの描画力、解像力にばかり注目していましたが、最近小さい判型の本を作るようになったんですね。高解像度だから大きいプリントというのももちろんいいのですが、小さいプリントだからこそ出る濃密感があるということを実感しました。一般の印刷物や写真プリントとは違う、DreamLaboの高密度感が実に心地いいんです。サイズが小さければ、コストもおさえられるのでコンパクトで濃密な1冊という方向性も追求していきたいですね。そして、DreamLaboを使った写真集を、たくさんの人につくってもらえたら、と考えています。

**星野俊光**  
Toshimitsu Hoshino  
ジャパンクリエイティブ株式会社  
専務取締役

**關信行**  
Nobuyuki Seki  
ジャパンクリエイティブ株式会社  
名古屋工場 部長

**下山孝弘**  
Takahiro Shimoyama  
ジャパンクリエイティブ株式会社  
フォトソリューション事業部  
主任

ジャパンクリエイティブ株式会社／東京都千代田区。1996年創立。全国各地およびグアム、ハワイ、ベトナムに支社および営業所を持ち、ウェディングの撮影からアルバム製作を中心に、写真・映像に関わるさまざまなサービスを展開している。ウェディングアルバム製作で培った画像処理技術および製本・加工技術をもとに、近年はDreamLaboを使用した限定写真集を数多く手がけており、写真家からの信頼も厚い。